

「熊」のアイクに見る現代アメリカ人の成長と挫折

小 野 雅 子*

Modern American's Spiritual Growth and Discouragement as Portrayed
by Ike McCaslin in Faulkner's "The Bear"

Masako Ono

The central figure in "The Old People," "The Bear," and "Delta Autumn"—three of the seven stories that comprise William Faulkner's novel *Go Down, Moses*—is Ike McCaslin, who symbolizes an important part of American history in the 1870s. In this there exists a gap between the rich and the poor caused by land ownership, the ruin of the wilderness, and racial discrimination heightened by miscegenation and incest.

The first three chapters of "The Bear," and the fifth chapter, are about a bear hunt. The fourth chapter, however, tells how and why Ike relinquishes ownership of his plantation.

Through each of these stories run the themes of human rights and the importance of preserving nature. Ike McCaslin, it should be noted, was educated by a man named Sam Fathers, who taught him to obey the order of nature, and to have endurance.

In the bear-hunt story, a bear named Old Ben symbolizes the wilderness, which is gradually conquered by humans. The animal is eventually killed by a wild dog, named Lion, and former slave named Boon, who has Indian blood.

Ike, meanwhile, who learned to behave bravely in the wilderness, and to obey the order of nature with humility—and this is the main topic of the fourth chapter of "The Bear"—decides to give his plantation to his cousin, Cas. He does this because he wants to escape from the curse of his family's history as southern landowners. Ike's grandfather, a white Christian who seduces a negro slave woman, later impregnates his half-cast daughter, too.

Ike's decision to give up his plantation causes another family tragedy, however. The grandson of Cas, the new owner, subsequently seduces a descendant of Ike McCaslin's grandfather, another young half-cast woman, and she bears him a son.

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) の「熊」("The Bear") は、短編集『行け、モーゼ』(*Go Down, Moses*, 1942) の中の 5 番目に置かれている物語である。この作品は、7つの短編から成る『行け、モーゼ』の中心的作品であるばかりではなく、その内容とテーマの深遠さ故に、短編小説ながら、フォークナーの傑作のひとつに数え挙げられている。その理由は、自然と文明¹⁾、土地所有と奴隷の所有さらに黒白雑婚や近親相姦といったそれらにまつわる問題²⁾など、『行け、モーゼ』全体、そしてフォークナーの多くの作品に現れる様々なテーマを、この短編小説の中に見ることが

できるからである。

「熊」の主人公は、「昔の人々」("The Old People"), 「デルタの秋」("Delta Autumn") といった一連の作品の主人公アイザック・マッキヤスリン (Isaac McCaslin), 通称アイク (Ike) である。作品の中では、彼の目からみた毎年恒例の熊狩りを中心として物語は展開し、この少年の精神的再生と、苦悩の末の挫折が描かれている。そして、アイクのこの精神的変遷は、その当時のヨーロッパからアメリカに移住してきた白人の歴史とその苦悩とを表すものである。何故なら、この作品の中では、この新天地に移住してきて大自然と接し、土地と、更には黒人を奴隷として財産のように所有してきた人々の歴史が描かれているからである³⁾。そういった意味で、アイクは、

* 教養課程 非常勤講師 (上原講師紹介)
平成 6 年 10 月 19 日受付

現代のアメリカ社会にまで綿々と受け継がれてきた土地と人種問題に悩まされる、現代アメリカ人の先駆けとも言えるのである。

そこでこの小論では、「昔の人々」「デルタの秋」についても言及し、アイクの成長とその限界について論じながら、アイク像の中で、アメリカの歴史とアメリカ人がどの様に描かれているのかを探ってみたい。

I

「熊」はもともと「ライオン—1つの物語」(1935) ('Lion: A Story') という『ハーパーズ・マガジン』(*Harper's Magazine*) に掲載されたものと、「熊」(1942) として『サタデー・イーブニング・ポスト』(*Saturday Evening Post*) に掲載されたものとが全面的に書き改められ、更に第四章が付け加えられて出来上がった作品である。「ライオン」という作品の中では、主人公はアイクではなく、フォークナー初期の傑作『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929) や、円熟期の代表作『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*, 1936) に登場したクウェンティン・コンプソン (Quentin Compson) と同じ名前の少年である。そして、ライオン (Lion) という名前の犬とチカソー族の血が4分の1混じるブーン・ホガンベック (Boon Hogganbeck) が、大森林を体現する大熊のオールド・ベン (Old Ben) を倒すという話に、物語の中心が置かれている。この中で描かれているのは、荒野の消滅と失われていく大自然への憧憬である⁴⁾。

他方、「熊」において熊狩りは、少年アイクの成長物語⁵⁾ に内包される形になっている。作品中の次の文章からもそのことが明らかである。

If Sam Fathers had been his mentor and the backyard rabbits and squirrels his kindergarten, then the wilderness the old bear ran was his college and the old male bear itself, so long unwed and childless as to have become its own ungendered progenitor, was his alma mater.⁶⁾

こうして、「熊」は、「昔の人々」や「デルタの秋」等『行け、モーゼ』の他の作品と関連し合うことになり、『行け、モーゼ』の一部分として、不可欠な作品となったのである。「熊」の中では、森の聖者サム・ファザーズ (Sam Fathers) の導きによって、少年アイクが大自然の使徒、更にはサムの後継者となるべく、修業を続けていく過程が描かれていく。その大森林での修業を通じて、

彼は、それまで抱いていた文明社会の価値観とは異なる世界へ足を踏み入れ、精神的に生れ変わる⁷⁾。そして、物語は、オールド・ベン対ライオンとブーン・ホガンベックの闘いという、アイク自身の修業をひとまず完成させるクライマックスへと至る。

以上の経過は、第一章から第三章に描かれているものである。そこで、この章ではその流れを辿り、熊、ライオン、そしてサムの死とともに終えたアイクの修業とはどのようなものだったのかということを探ってみたい。その過程で、アイクの大自然での洗礼を描いている「昔の人々」にも言及していきたい。

作品の中で描かれる熊狩りは、ド・スペイン少佐 (Major de Spain), コンプソン将軍 (General Compson) やマッキヤスリン・エドモンズ (McCaslin Edmonds), 通称キャス (Cas) といった人々によって、毎年決まっていた。この狩りは、こうした南部社会の白人貴族階級に属する人々にとっては、娯楽に近いものであった。熊を捕えることが目的なのではなく、彼らにとって、狩りは一種の儀式的なものだったのである。かつて、彼らの祖先が住んでいたヨーロッパで貴族が狩りに興じたように、彼らもまた熊狩りを娯楽として行っていた⁸⁾。彼らには、自然を徹底的に破壊しようという意志はなく、寧ろ自然との共存を暗黙の了解のうちに認めていたのである。だからこそ、その言動の中にしばしば、自然に対して敬意を払おうとする気持ちが顔を覗かせるのである。その最たるものとして、熊をあたかも人間のようにみなしオールド・ベンと名付けたことが挙げられる。それは、彼らが熊を人間と対等の存在として認めているという証でもあった。そして、熊狩りを描いた第一章から第三章にかけて牧歌的ともいえる雰囲気漂っている理由も、こうした狩りの性質から来ている。そして、アイクが加わることになったのは、このような熊狩りだった。だが、アイクが少佐たちと一線を画しているのは、彼が大自然を中心とした見方をしている点である。即ち、少佐たちが人間を基準にして熊に象徴される自然を見ているのに対し、アイクは人間を、大自然の足元に膝まづくべき存在だと考えているのである。

そして、アイクをそうした考え方へと導いたのが、サムだった。サムは、ヨクナパトーフ郡北部のタラハッチー河流域の低地に住む年老いた漁師であるが、かつては、アイクの祖父キャロザーズ・マッキヤスリン (Carothers McCaslin) の奴隷であった。その父親は、キャロザーズに土地を売ったインディアン族のチカソー族

「熊」のアイクに見る現代アメリカ人の成長と挫折（小野雅子）

の酋長イケモチュッベ (Ikkemotubbe) で、その母親は黒人奴隷だった。ところが、サムは自らの父親によって母親とともにマッキヤスリンに売られてしまったのである。そのサムが、森の中で生活するようになった経緯は、「昔の人々」の中に描かれている。

「昔の人々」の中では、純粋のチカソー族のジョーベーカー (Jobaker) とサムの関わり、そして彼の遺志を継いでサムが森に住むようになった経緯が描かれている。ジョーベーカーの生前、唯一彼の家を訪ねた人間はアイクを伴ったサムであり、ジョーベーカーとサムはふたりにしかわからない言葉で話をしていた。そして、このふたりに関する描写には、ふたりだけに共通する世界を持つことでサムが自分の中に流れるチカソー族の酋長の息子としての血に目覚め、同じインディアンの血を受け継いでいるジョーベーカーの精神的な意味での後継者になっていく様が、暗示されている⁹⁾。それだからこそ、ジョーベーカーの死後、サムは彼の死体を焼いて密葬し、文明社会、即ち南部社会に関係するあらゆるものを断ち切って森に住む道を選んだのである。大森林の掟に従うことを身をもって実践したサムのこの行動は、社会からの逃避ではない。何故なら、インディアンは本来、大森林と協調しながら生活してきたのであり、白人がこの新天地に渡ってきたことで、文明社会と妥協して生きていかざるを得なくなったからである。

その一方でサムは、アイクを自分の後継者に育て上げようとしていた。そのことは、アイクの次の言葉から推察することができる。

He believed that he and Sam both knew that this was not only temporary but that the exigencies of his maturing, of that for which Sam had been training him all his life some day to dedicate himself, required it.

.....

now the boy discerned in that very talk under the high, fierce August stars a presage, a warning, of this moment today. "I done taught you all there is of this settled country," Sam said. "You can hunt it good as I can now. You are ready for the Big Bottom now, for bear and deer. Hunter's meat," he said. "Next year you will be ten. You will write your age in two numbers and you will be ready to become a man. Your Pa"... (pp. 173-174)

サムが白人のアイクを自分の後継者として選んだということは、一見奇妙に思われるかもしれない。しかし、サム自身が、インディアンの血だけではなく黒人の血と白

人の血をも引いているということを考えれば、それも決して不思議なことではない。生粋のインディアンではないにもかかわらず、ジョーベーカーからインディアンの伝統を受け継いだサムは、自分の体にも流れる白人の血を持つアイクに、インディアンの価値観と黒人の生き方を伝えようとしたのである。インディアンの伝統的精神は、種族の血に関わりなく、それを受け入れたものへと引き継がれるのである。アイクは、サムがジョーベーカーの小屋に同伴したことで、ふたりの会話の内容を少しずつ理解していった唯一の白人だったということから考えても、彼がサムの後継者に選ばれたのは自然の成り行きだった。

And perhaps once a month the boy would find them in Sam's shop—two old men squatting on their heels on the dirt floor, talking in a mixture of negroid English and flat hill dialect and now and then a phrase of that old tongue which as time went on and the boy squatted there too listening, he began to learn. (p. 172)

サムに導かれたアイクは、10歳になった年の11月に初めて荒野の熊狩りに参加する。しかしアイクには、オールド・ベンの姿を見ることができない。ただサムによって、ベンには、森の中でアイクも熊狩りに参加していることがわかっていると教えられるだけである。二度目に彼は熊が爪痕をつけた丸太を見つけはしたものの、鉄砲を持っていたために、結局熊と出会うことはできなかった。しかし、三度目に、鉄砲を外し、更に身に付けていた時計と磁石を仕事着から外して荒野の中にはいった時、初めてアイクは熊の姿を目にすることができたのだ。しかも、オールド・ベンのほうから姿を現したのである。

He had already relinquished, of his will, because of his need, in humility and peace and without regret, yet apparently that had not been enough, the leaving of the gun was not enough. He stood for a moment—a child, alien and lost in the green and soaring gloom of the markless wilderness. Then he relinquished completely to it. It was the watch and the compass. He was still tainted. He removed the linked chain of the one and the looped thong of the other from his overalls and hung them on a bush and leaned the stick beside them and entered it

.....

the tree, the bush, the compass and the watch glinting where a ray of sunlight touched them.

Then he saw the bear. It did not emerge, appear: it was just there,... (pp. 208-09)

アイクとオールド・ベンとのこの邂逅は様々な意味を持っている。まず第一に、この出来事によって、アイクは真の荒野の使徒としての第一歩を歩み出したといえる。この出会いそのものについて考えてみるならば、これはアイクに象徴される文明社会とオールド・ベンに象徴される大自然との出会いだった¹⁰⁾。そして、何よりも重要な点は、熊と顔を会わせるまでの間に、アイクは熊に受け入れられるためには、自然を恐れぬ勇気を持つと同時に、自然の力に身を委ねることが重要であることを悟ったことにある。ここで描かれる、銃や磁石などの文明社会を表す道具を捨てるという行為は、文明社会の汚れを捨てることである。そして文明の汚れを捨てた時、ベンは、初めてアイクを受け入れたのである。

上述のような形でオールド・ベンと出会うことになったアイクの、自然とそれを象徴する熊への関わり方は、当然ド・スペイン少佐、コンプソン将軍、そしてキャストたちの姿勢とは異なったものとなっていた。即ち、熊に認められ熊と出会うことが目的のアイクにとっては、自分自身がいかにか生きていくべきかという生き方の規範を、大自然と熊狩りに求めることになったのである¹¹⁾。

第二章では、アイクはすでに 13 歳となっている。この年までにアイクは初めて牡鹿を殺し、サムによって鹿の血による洗礼を授けられている。「昔の人々」の中で描かれている鹿の血による洗礼は、少年アイクが大自然の使徒となるための目に見える形での儀式であった。

So the instant came. He pulled trigger and Sam Fathers marked his face with the hot blood which he had spilled and he ceased to be a child and became a hunter and a man. (pp. 177-78)

アイクは、「サム・ファザーズが彼を、単なる猟師としてではなく、消え去り忘れられた種族にかかわって彼が受け継いできたもので印をつけてくれていたこと」(...that Sam Fathers had marked him indeed, not as a mere hunter, but with something Sam had had in his turn of his vanished and forgotten people.) (p. 182) に気が付いたのである。こうして、アイクは正式に、サムの後継者として認められた。更に、この時までに彼は熊を一頭殺しており、キャンプから 25 マイル以内であれば知らぬところはなく、オールド・ベンの足跡を自分の足跡以上に見分けることができた。

その同じ年、アイクの目の前に現われたのが犬のライオンである。「オールド・ベンを捕える奴ですよ。」("That's gonter hold Old Ben.") (p. 217) という言葉からもわかるように、サム自身は、その犬がオールド・ベンを倒すことができるということを知っていた。一方、アイクも、大自然を体現するオールド・ベンを倒す犬が、自然の掟に従って生きるサムにとっても脅威となることを知っておくべきだったのである。

So he should have hated and feared Lion. Yet he did not. It seemed to him that there was a fatality in it. It seemed to him that something, he didn't know what, was beginning; had already begun. It was like the last act on a set stage. It was the beginning of the end of something, he didn't know what except that he would not grieve. He would be humble and proud that he had been found worthy to be a part of it too or even just to see it too. (p. 226)

別の見方をすると、アイクの後継者としての成長は、サムの死と熊狩りの終焉への序曲でもあった。そして、ジョーベイカーが自分の後継者としてのサムをこの世に見出しえた時死を迎えたように、サムの後継者としてのアイクが成長してきた時、サムもまた死んでいくことになったのである。

熊狩りに終焉をもたらすきっかけとして登場したライオンに、人間の言うことを聞くならば、納屋から出ることができることを教え込んだのはサムだったが、彼はブーンにその世話を任せた。サムが、鉄砲で何かを撃って命中させたことのないブーンに対して、ライオンと共にオールド・ベンを倒す役割を敢えて与えたことに、この熊狩りのもつ意味が潜んでいる。

前述のように、この熊狩りは熊に象徴される大自然と向い合うこと自体が目的という、楽しみのための狩猟であった。しかし熊狩りは、もはやド・スペイン少佐やコンプソン将軍といった貴族たちのみが参加する行事ではなくなってきていた。というのは、それまでは熊を倒すことなど思いもよらぬことであったのが、ライオンという犬の登場によって、オールド・ベンを倒すという夢物語が現実のものとなったからである。このことは、とりもなおさず、熊狩りの性格の変質を象徴している。これまでは熊と人間との間に一種の不文律があり、それに従い両者は振舞うことを期待されていた。それは、お互いに相手を追い詰めすぎず、相手の立場を尊重するといった類いのものである。だからこそ、仔馬が殺された時、

「熊」のアイクに見る現代アメリカ人の成長と挫折（小野雅子）

ド・スペイン少佐はその掟を熊が破ったと誤解して、怒りをあらわにしたのである。

“A panther might jump a doe, and he wouldn't have much trouble catching the fawn afterward. But no panther would have jumped that colt with the dam right there with it. It was Old Ben,” Major de Spain said. “I'm disappointed in him. He has broken the rules. I didn't think he would have done that. He has killed mine and McCaslin's dogs, but that was all right. We gambled the dogs against him; we gave each other warning. But now he has come into my house and destroyed my property, out of season too. He broke the rules. It was Old Ben, Sam.” (pp. 213-14)

しかし実際に熊との共存協定を破ったのは、人間の側だった。正確に言えば、ド・スペイン少佐たちが望むと望まざるとに関わらず、彼らの狩りに加わるメンバーの顔ぶれにはこれまではいなかったような人々が加わったのである。それは、熊によって家畜を殺された農夫や、製材所の人夫や伐採夫、遠くの町々からやってきた輩といった人々だった。彼らが熊狩りに関心を持ったのは、ライオンの登場によって、自分たちに代わって、殺された家畜の復讐がなされる希望が出てきたからである。熊狩りは、彼らにとって、野次馬的な興味の対象にすぎなかったのである。故に、オールド・ベンという名前が与えられたことに象徴される、大森林の主というその大熊の特質は、彼らにとっては、何の意味も持っていなかった。この熊は、巨大で恐ろしい獣に過ぎず、彼らの生活を脅かす可能性を持った存在であったり、もしくは彼らの日常生活とは懸け離れた存在にほかならなかったからである。このことは、新参者の参加者にとり、熊、そしてその熊に象徴される荒野は、征服すべき対象にすぎないことを示している。だからこそ、こうした人々によって、熊とライオン、そしてサム死後、大森林には汽車が入り込み、荒野が町によって浸食されるという状況がもたらされることになったのである。

こうした新参者や自然と乖離した社会によってではなく、自然児ともいべきブーンと野性の獣とよんでもよいライオンによって、大自然の象徴である熊が殺されるという結末には、一種の矛盾すら感じられる。けれどもここには、自分の分身のオールド・ベンを殺すことになるライオンをブーンに世話させたサムの姿勢と共通する、大自然の資質を見ることができる。即ち、サムは、文明社会の人間によって葬り去られるよりも、同じイン

ディアン血を引く者によって殺されることを望んだのであり、熊が象徴する自然もまた、同じ資質を持つものによる死を受け入れたのである。サムとオールド・ベンが一体であるように、ブーンとライオンは一体である。両者の共通性に言及した表現として、以下のようなものが挙げられる。

It (=Lion) moved its head and looked at him across the trivial uproar of the hounds, out of the yellow eyes as depthless as Boon's, as free as Boon's of meanness or generosity or gentleness or viciousness. (p. 238)

ブーンは、恐れることなく熊に飛びかかったライオンの命を救おうと、鉄砲のような文明の利器ではなくたった一本のナイフだけを手に、熊に向かっていった。ベンと戦うことになったのが、勇気と強い意志と忍耐を持ったブーンとライオンであったという事実は、大森林の主である熊と正面きって対抗する資格があるのは、まったく文明の色に染まらない自然児と、熊同然の、文明社会に慣れることがない獣のような犬だけだということを暗示している。

そして、ブーンとライオンがオールド・ベンを倒したということは、逆説的に、アイクの限界と彼に与えられた役割を暗示している。サムの弟子として武器や磁石といった文明の利器を捨て、勇気や忍耐の意味を学んでいたアイクではあったが、彼の場合にはそれらは習得して得たもので、生得の資質ではなかった。それ故に、熊を実際に倒すという仕事には関わることができず、彼は、傍観者としての立場に甘んじざるを得ないのである。その結果、サムの死に直接関わる役割を課せられたのは、ブーンであった。けれども、アイクには、彼にしかできない役割を与えられた。即ち、それは、サムとオールド・ベンそしてライオンが死んで荒野が失われていく中で、白人でありながら、インディアンと黒人の生き方を学んだアイクが、白人主導の社会をどの様に変えていくのかというものである。そして、三者死後の彼の生き方を描き出しているのが、第四章と第五章なのである。

II

この章では、「熊」の第四章と第五章の内容とその関連性、及び両章と前三章との関わりについて考えてみたい。

物語の流れを遮るかのように章の途中に置かれた第四

章が、内容や文体の点において、他の章と異なっていることはしばしば指摘されるところである¹²⁾。第四章の文体上の異質性は、その内容の点から考えると当然でもある。第一章と第三章では熊狩りが、そして第五章の中でも、熊狩りの延長線上にあるオールド・ベン、ライオンそしてサム死後の後日談が描かれていた。この四つの章では、作者フォークナーの客観的な視点に並列して、主人公アイクの視点で物語が展開していく。そして、彼の眼から見た荒野と熊と犬、それらを取り巻く、もしくはそれらと関わる人間の姿が浮き彫りにされるのである。一方、第四章では、アイクが世襲財産の放棄を宣言することになった経緯が、アイクとその従兄弟のキャスとの語りの中で明らかにされる。このふたりの対話は、『アブサロム、アブサロム!』におけるクウェンティン・コンプソンと友人のシュリーヴ・マッキャノン (Shreve McCannon) とのやりとりと類似しているが、前述のように、「ライオン」の中ではクウェンティンが主人公だった経緯を考えれば、それも不思議ではない。クウェンティンとシュリーヴの対話がクウェンティンひとりの心の中の対話であるかのように、「熊」の中のアイクとキャスの語りは、アイク自身が財産放棄を決めるまでの心の中での葛藤を写し出しているように思われる。『響きと怒り』の中、理想主義者であるが故に、苦悩の末自ら死を選ぶような線の細さと、自己中心性とを合わせ持った登場人物クウェンティン・コンプソンもまた、アイクを理解する助けとなる。この二作品におけるクウェンティンが、果たして同一人物かということに関しては、議論の分かれるところである¹³⁾。しかし、他の四章のアイク像とはやや趣を異にする第四章のアイクが、抽象的な理想主義を唱え、理論の世界へと入り込み、自分の考えに捕われて現実が見えなくなってしまう所以は納得できよう¹⁴⁾。そこでこの章では、アイクの人物像についてもっと詳しく見ていきながら、改めてアイクに課された役割について、考えてみたい。

第四章と第五章の時間的順序に関しては、第五章の方が第四章に先立つ。第五章ではアイク 18 歳の時の出来事が描かれているのに対し、第四章では 21 歳の時の出来事が描かれている。しかし、第四章の中のアイクの、人種問題と土地所有の問題に対する対処の仕方を、熊狩りを主題とした作品全体の文脈の中で考える時読者は、21 歳の彼の決断の源を、18 歳の時点を描く最終章の中に認めることができるのである。

第四章の中でアイクは、マッキャスリン家の台帳から

一族の秘められた歴史を知ることになる。サム・ファーズの父親イッケモテュッベから土地を買い取った彼の祖父キャロザーズ・マッキャスリンは、黒人奴隷の労働によりその農園の繁栄を築き上げてきた。土地ばかりでなく人間の売買を当然のことのように行ってきたキャロザーズだが、彼は更なる罪を犯していた。それは、黒白雑婚と近親相姦の罪である。彼は、自分の買い取ってきた黒人女性のユーニス (Eunice) に女の子を生ませた上、その子トマシーナ (Tomasina) と近親相姦を犯して、タール (Turl) という男の子まで生ませてしまったのである。それを知った母親のユーニスは自殺へと追い込まれてしまう。しかし、キャロザーズは、償いと称して、わずか 10 エイカーの土地を遺譲しただけだった。

台帳によってそうした祖父の罪科を知ったアイクは、祖父にかわってその罪を償い、自分自身も含めた一族を呪縛から解こうとする¹⁵⁾。人権を冒瀆する祖父の行為は、自然の前で謙虚に生きることをサムから学んでいた彼には、自然に対する冒瀆行為に等しく思えたのである¹⁶⁾。人間が同じ人間を支配するという黒人奴隷制度とは、人間の生得の自然権、即ち自由と平等の権利を侵害する行為に他ならない¹⁷⁾。それ故に、アイクはそうした祖父の罪を繰り返さぬよう、キャロザーズ・マッキャスリンの直系の子孫であるということから受け継ぐことになっている農園の権利を拒否することにしたのである。それと同時に、アイクは、トマシーナの息子タール (Turl) の娘ソフォンシバ (Sophonsiba) に償いとして 3000 ドルの金を渡すのであった¹⁸⁾。

だが、こうしたアイクの行為は、物で全てを精算しようとした祖父の行為と何ら変わるところはない。それ故に、マッキャスリン一族のこれまでに犯してきた罪を浄化しようとするその思いとは異なり、アイクは祖父の行為を繰り返してしまうことになる。このことは、台帳に記したアイクの筆跡が祖父の筆跡に似ているという描写の中からも窺える。この箇所には、アイクと祖父のキャロザーズとの近似性が暗示されており、興味深い。

...; his own hand now, queerly enough resembling neither his father's nor his uncle's nor even McCaslin's, but like that of his grandfather's save for the spelling:...

(p. 273)

一方でアイクは、父セオフィラス (Theophilus) 通称バックおじさん (Uncle Buck) と叔父アモーディアス (Amodeus) 通称バディおじさん (Uncle Buddy) の双子

「熊」のアイクに見る現代アメリカ人の成長と挫折（小野雅子）

の兄弟が、名目上キャロザーズ・マッキヤスリンの奴隷解放をした、そのやり方を不十分であると考えていた。

Father dide Lucius Quintus Carothers McCaslin, Callina 1772 Missippy 1837. Dide and burid 27 June 1837

Roskus. raised by Grandfather in Callina Dont know how old. Freed 27 June 1837 Dont want to leave. Dide and Burid 12 Jan 1841

Fibby Roskus Wife. bought by grandfather in Callina says Fifty Freed 27 June 1837 Dont want to leave. Dide and burd 1 Aug 1849

Thucydus Roskus @ Fibby Son born in Callina 1779. Refused 10acre peace fathers Will 28 Jun 1837 Refused Cash offer \$200. dollars from A. @ T. McCaslin 28 Jun 1837 Wants to stay and work it out

(p. 266)

アイクは、農園をそのまま維持し続けた父と叔父のやり方を、祖父のやり方と根本的な違いはないと考えたのである¹⁹⁾。そこで、彼らとは全く異なった道を選ぶべく、農園所有の権利を捨てて全てのものから自分を開放し、イエス・キリストのように大工として生きていく道を選んだのである。アイクはその理由を、旧約聖書の中にある、アブラハムがイサクを神への燔祭の捧げ物としようとした物語に言及しながら、説明している。

‘Yes. If He could see Father and Uncle Buddy in Grandfather He must have seen me too.—an Isaac born into a later life than Abraham’s and repudiating immolation: fatherless and therefore safe declining the altar because maybe this time the exasperated Hand might not supply the kid—’...

(p. 283)

これを逃避だと指摘するキャスに対して「いいよ。逃避でも。」(‘All right. Escape.’) (p. 283) というアイク自身の言葉からも推察できるように、アイクも自分が逃避しようとしていることはわかっている。しかし、その逃避が意味のあるものであることを自らに納得させるかのように、アイクは、自分の行動が神の願いを汲んだ償いであると熱っぽく語る。だが、その流れるような独演は熱に浮かされた人のそれに似て、話が佳境に入っていけばいくほど、現実から懸け離れていき独りよがりの理想主義へと陥り、偏った世界観を露呈していくのである。別の言い方をすると、アイクの理想論はいつの間にか、農園の所有権を放棄し大工になるという、自己の決断の正当性を主張するものへと変容してしまうのである。それが、マッキヤスリン家の問題を新大陸アメリカの歴史と

いう広い視点から捉え直そうとする²⁰⁾試みに現れる、アイクの、神とヨーロッパからアメリカへの移住者との関係に関する自己流の解釈からも窺える。

...He used a simple egg to discover to them a new world where a nation of people could be founded in humility and pity and sufferance and pride of one to another. And grandfather did own the land nevertheless and notwithstanding because He permitted it, not impotent and not condoning and not blind because He ordered and watched it.

(p. 258)

しかし、農園の権利を放棄し、それをキャロザヘーズの血を引く従兄弟のキャスへ譲り渡すことにしたアイクの決意に対してキャスは、次のように問いかける。

...You said how on that instant when Ikkemotubbe realised that he could sell the land to Grandfather, it ceased forever to have been his. All right; go on: Then it belonged to Sam Fathers, old Ikkemotubbe’s son. And who inherited from Sam Fathers, if not you?...

(p. 300)

この問いかけに対し、アイクは、「サムは僕を自由にくれたんだ。」(‘Yes. Sam Fathers set me free.’) (p. 300) と答えるだけである。ここでいう自由という言葉によって表されているのは、サムの導きによって、アイクが遺産を放棄するという決断を下すことができ、彼自身だけが一族の歴史の呪縛から開放されたということである。もとよりそれが真の自由である筈はなく、そのことを理解しているのは、当事者のアイクではなく、従兄弟のキャスだったのである。

だが、そのキャスも、かつて彼自身がアイクに読んで聞かせたジョン・キーツ (John Keats, 1795–1821) の詩に歌われた真実から、この大地が呪われていることを認め、結局はアイクの財産放棄を受け入れるに至る²¹⁾。

‘Courage and honor and pride, and pity and love of justice and of liberty. They all touch the heart, and what the heart holds to becomes truth, as far as we know truth.

.....

‘Habet then.—So this land is, indubitably, of and by itself cursed:’ and he

‘Cursed:’...

(p. 297–98)

しかし、たとえキャスがアイクに譲歩してしまう様に描いてはいても、作者フォークナー自身はアイクのこうした行為を逃避とみなしている。

Well, there are some people in any time and age that cannot face and cope with the problems. There seem to be three stages: The first says, This is rotten, I'll have no part of it, I will take death first. The second says, This is rotten, I don't like it, I can't do anything about it, but at least I will not participate in it myself, I will go off into a cave or climb a pillar to sit on. The third says, This stinks and I'm going to do something about it. McCaslin is the second. He says, This is bad, and I will withdraw from it.²²⁾

サムの後継者として育てられていたアイクは、サム同様現実を直視して生きるべきだったのである。黒人の血はサムに忍耐と勇気という資質を与えていた。また、自分の中のインディアンの血の存在を知っていたサムは、ジョーベーカーの跡を継いで、大地を守り、大地にのみ従う生き方をしようとしたのである。彼のその生き方が、荒野は白人によって征服されてしまうことを知りながら、そういう状況に耐え、それを受け入れる力をサムに与えたのである。だからこそ、サムは、熊を倒しうるライオンが現われた時にも、死を自分と荒野の運命として積極的に受け入れ、ライオンの世話をブーンに委ねたのだ。

それに対して、アイクは、自分の運命に目を向けようとはしない。サムを師として従ったことで、アイクは、征服するのではなく、謙譲をもって接するという新たな荒野との関係を築き、新しい価値観を得ることができた。こうした精神的な再生が、彼に、土地や奴隷所有の誤りを気付かせたのである²³⁾。このことにより、アイクは、それまでの白人社会の価値基準であった白人がこの両者よりも優位に立ち、それらを支配する権利があるとする考えを捨てることができた。土地の問題と人種問題は、白人社会の方向性を定める大きな要因であったし、現代社会においてすら、それらは解決されない問題として残っている。それだからこそ、精神的に生まれ変わり、新しい価値基準を修得した数少ない白人としてアイクは、サムの遺志を継いで、自然と人間、また、白人と黒人の調和を図るという役割を果たす可能性を持っていたのである。しかし、実際に彼が行なったことは、積極的に問題の解決に取り組むことではなく、一族の罪から自分だけが逃れるという受け身的な道を選択だったのである²⁴⁾。イエス・キリストに倣って大工になろうとしたアイクは、皮肉なことに、人間のためにその命を捨てたキリストとは異なった自己防衛的な道を選んでしまうので

ある²⁵⁾。

そして、このようなアイクの逃避の姿勢の予兆は、第五章のアイク 18 歳の時にすでに現れていた。オールド・ベン、サム、そしてライオンが死んだ後、大森林には一気に開発の手が入り、あっと言う間に、荒野は失われていく。汽車に代表される森林の都会化を目の当たりにしながら、アイクはその現実から目をそむけようとする。

...so that he arranged for the care and stabling of his mare as rapidly as he could and did not look any more, mounted into the log-train caboose with his gun and climbed into the cupola and looked no more save toward the wall of wilderness ahead within which he would be able to hide himself from it once more anyway. (p. 318)

アイクの現実逃避の態度は、すでにこの時点に源を辿ることができるのである。

それ故に、第四章にアイクの農園の所有権放棄の話が来ることは、それを熊狩りの物語の文脈で捉えようとするフォークナーの意図の表れであった。即ち、フォークナーは、アイクを通して、荒野での熊狩りを主軸とした修業によって精神的成長を遂げたものの、その学んだ事柄を現実に生かすことができず、現実を変えることのできなかった人間の姿を描いたのである²⁶⁾。第四章で、アイクは、奴隷制度と土地所有という一族の問題を通じ、南部の歴史、更にはアメリカの歴史、基本的な人権の問題といった現実社会の問題の核心を突く事柄に、確かに言及している²⁷⁾。しかし、彼の正義感と理想主義は、彼独自の理論の構築に寄与するだけで、現実の問題には何の解決ももたらさない。その結果アイクは、現実社会の中では、挫折してしまうのである。そしてこの点こそ、「熊」を、単なる楽観的な自然賛美や人間賞讃の物語にしまわれない所以である。一見異質の第四章と他の章は、異彩を放つ第四章が他の章と関連性を保つことで、お互いに響き合い、「熊」に続く「デルタの秋」の悲劇へと至る壮大な協奏曲を奏でるのである²⁸⁾。

『行け、モーゼ』の中で「熊」の次に置かれている「デルタの秋」は、すでに妻を亡くし子供もいないアイクと、彼を取り巻く人々の物語である。アイクには子孫も、後継者もないという事実は象徴的である。自らには妻も子もなかったのに、ジョーベーカーにはサムが、そしてサムにはアイクという後継者がいたのとは対照的である。こうした相違は、ジョーベーカーとサムが、現実を

「熊」のアイクに見る現代アメリカ人の成長と挫折（小野雅子）

見つめて生きていたのに対して、アイクは現実を直視することなく、逃避してしまったためである。一旦逃避の道を歩み出して以来、アイクは人間的に成長することがなくなってしまった。このことは、農園の所有権を放棄した後、「デルタの秋」の70歳を過ぎた時点に至るまでのアイクには、特筆すべき事柄がなく、イエス・キリスト的な生活をしようとしたアイクがそれを果たせず²⁹⁾、ただ「アイクおじさん」(‘Uncle Ike’) (p. 336) と呼ばれるに過ぎない存在となっていることから、推察される³⁰⁾。すべてから逃避した21歳の段階でアイクは、他者に伝えるべき人生の規範を失ってしまった。その結果、彼は誰のことも導くことができなくなってしまったのである。

そればかりでなくアイクは、自分が解決すべき問題から逃れたそのツケを、結局払わざるをえなくなる。即ち、農園の所有権を譲り受けたキャスの孫にあたるロス(Roth)が、キャロザーズ・マッキヤスリンと同じように、黒人の女性に子供をませたのだった。しかも、その黒人女性とは、アイクの祖父キャロザーズが生ませた黒人女性トマシーナの子孫なのである。アイクのもとを訪れたその少女は次のように言う。

“I would have made a man of him. He’s not a man yet. You spoiled him. You, and Uncle Lucas and Aunt Mollie. But mostly you.”

“Me?” he said. “Me?”

“Yes. When you gave to his grandfather that land which didn’t belong to him, not even half of it by will or even law.” (p. 360)

アイク自身が祖父と同じ罪を犯したわけではなかったが、自らの逃避の姿勢ゆえに、結局は子孫に一族の罪を譲り渡してしまったのである。

結 論

以上のように、「熊」という短編小説は「昔の人々」「デルタの秋」という他の短編との関連性を持ちながら、『行け、モーゼ』という作品全体を貫く自然と黒人という二大テーマの両方を兼ね備えた作品となっている。そしてこの作品では、アイクという一人の少年の成長していく過程とその限界が暗示されているのである。そして、アイクのこの限界こそ、1870年代から1880年代の南部白人社会に生きていた人々の限界だったのではないだろうか。

フォークナーは、その当時の白人の典型的人物であっ

たアイクの父や叔父パディのような人物が、数多くアメリカにいたことを、次のようにキャスとアイクに語らせている。

‘... And perhaps you are right, since although you admitted three generations from old Carothers to you, there were not three. There were not even completely two. Uncle Buck and Uncle Buddy. And they not the first and not alone. A thousand other Bucks and Buddies in less than two generations and sometimes less than one in this land which so you claim God created and man himself cursed and tainted. Not to mention 1865.’ and he ‘Yes. More men that Father and Uncle Buddy,’... (p. 261)

数知れずいたバックおじさんやパディおじさんの次に続く世代の人間として、何百人ものアイクもまた存在していたに違いない。そして、アイク同様、自然や人種問題について苦悩しつつ、問題を解決できないまま逃避し、志を果たすことなく挫折していったのである。その結果として、アイクの祖父キャロザーズ・マッキヤスリンが引き起こしたのと同じような悲劇が、繰り返し起こってきたに違いない。それらは、自然破壊や土地所有の有無から生じる貧富の差、そして、なかなかなくなる人種差別といった形で、今日のアメリカ社会の根底に脈脈と受け継がれているのである³¹⁾。アイクの苦悩は、現代アメリカ人が抱える苦悩でもあった。そうした意味で、アメリカの歴史が抱える問題に翻弄されたアイクは、現在のアメリカ白人社会の源に位置し、アメリカ白人の祖先なのである。文字通りの意味では、アイク自身は子孫を残すことはなかった。しかし、現代アメリカ人が抱える苦悩にぶつかった最初のアメリカ人として描かれたことで、アイクは、意図せずして、現代アメリカ人の祖父となったのである。

注

- 1) Harry Modean Campbell and Ruel E. Foster, “Primitism and *The Bear*,” *William Faulkner: A Critical Appraisal* (Norman: Univ. of Oklahoma Press, 1951): pp. 143, 147. qtd. in Francis Lee Utley, Lynn Z. Bloom, and Arthur F. Kinney, eds., *Bear, Man, and God: Seven Approaches to William Faulkner’s “The Bear”* (New York: Random House, 1964), p. 279–80. Walter F. Taylor, Jr., “Let My People Go: The White Man’s Heritage in *Go Down, Mose*, *South Atlantic Quarterly*, LVIII: 1 (Winter, 1959): 20–

30. qtd. in Utley, Bloom, and Kinney, eds., *Bear, Man, and God*, p. 291.
- 2) Taylor, Jr., p. 293.
- 3) Graham Clarke, "Marking Out and Digging In: Language as Ritual in *Go Down, Moses*," in *William Faulkner: The Yoknapatawpha Fiction*, ed., A. Robert Lee (London: Vision Press, 1990), p. 148.
- 4) William Van O'Connor, "The Wilderness Theme in Faulkner's 'The Bear'" in *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, eds., Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery (East Lansing: Michigan State Univ. Press, 1951), pp. 327-28.
- 5) R. W. B. Lewis, "The Hero in the New World: William Faulkner's *The Bear*," *Kenyon Review*, XIII: 4 (Autumn, 1951), 641-60. qtd. in Utley, Bloom, and Kinney, eds., *Bear, Man, and God*, p. 306.
- 6) William Faulkner, *Go Down, Moses* (New York: The Modern Library, 1955) p. 210. 以下 *Go Down, Moses* からの引用はすべて同書により、本文中の括弧内に頁数のみ記す。
- 7) Olga W. Vickery, *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1959), p. 132. Daniel Hoffman, *Faulkner's Country Matters: Folklore and Fable in Yoknapatawpha* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1989), p. 150.
- 8) Hoffman, p. 147.
- 9) Mick Gidley, "Sam Fathers's Fathers: Indians and the Idea of Inheritance," in *Critical Essays on William Faulkner: The McCaslin Family*, ed. Arthur F. Kinney (Boston: G. K. Hall & Co., 1990), p. 127. John R. Cooley, "Sam Fathers and Doom," in *Critical Essays*, ed. Kinney, p. 132.
- 10) Campbell and Foster, p. 280. Taylor, Jr., p. 291. primitive world 対 modern world ということについて述べた論文は、数多くある。
- 11) Hoffman, p. 163.
- 12) Irving Howe, "The Relationship Between Part IV and the Rest of *The Bear*," *William Faulkner: A Critical Study* (New York: Random House, 1952): pp. 186-89. qtd. in Utley, Bloom, and Kinney, eds., *Bear, Man, and God*, pp. 349-52. 第四章とその他の章の関係、テーマの上での関連性について論じた論文は、数多い。
- 13) 大橋健三郎著、『フォークナー研究』第二巻(東京, 南雲堂, 1979 年) pp. 193-211. 『『響きと怒り』との近さ, 遠さ』の中では、『アブサロム, アブサロム!』のクウェンティン・コンプソンと『響きと怒り』のクウェンティン・コンプソンについて詳しく分析されている。
- 14) David H. Stewart, "The Purpose of Faulkner's *Ike*," *Criticism*, III: 4 (Fall, 1961): 333-342. qtd. in Utley, Bloom, and Kinney, eds., *Bear, Man, and God*, p. 335.
- 15) Davis, p. 145.
- 16) Taylor, Jr., p. 292.
- 17) Davis, p. 146.
- 18) Stewart, pp. 330-31.
- 19) Davis, p. 147.
- 20) Stewart, p. 334.
- 21) 大橋健三郎『フォークナー アメリカ文学, 現代の神話』(東京, 中央公論社, 1993 年), p. 170.
- 22) Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University: Class Conference at the University of Virginia, 1957-1958* (New York: Random House, 1965), pp. 245-46.
- 23) Vickery, p. 132.
- 24) Stewart, p. 331.
- 25) Vickery, p. 133.
- 27) Davis, pp. 147-48.
- 28) John Lydenberg, "Nature Myth in Faulkner's *The Bear*," *American Literature*, XXIV (March, 1952): 62-72. qtd. in Utley, Bloom, and Kinney, eds., *Bear, Man, and God*, p. 282.
- 29) Hoffman, p. 169.
- 30) Vickery, pp. 133-34.
- 31) Hoffman, p. 151.